

# 被爆者に謝する

森 弘太

被爆作家大田洋子さんが逝去された1963年の翌年、筆者は、彼女の記録小説『夕風の街と人』で取材の中心となった基町相生を、いくどか相生橋からながめたり土手を歩いてきた。大田文学は、映画『河』製作の動機となった懐かしい偶然である。

相生土手は相生橋の東詰めから三篠橋まで4、5メートル幅の河川敷・堤防敷に物置小屋のごとき不法住宅が密集していた。大田洋子の記録によれば、医療・生活援助のない原爆被爆者、就職や結婚で差別をさけるために被爆を隠す男女、家族も原爆で失った復員兵、引き揚げ者、平和公園建立のために追い退けられた中島町の人たち……「原爆スラム」と蔑視される人たちであった。

映画『河』は、相生土手に住む数名の被爆者の協力を得てクランクインしたが、協力には2点の要請があった。

一つは、「映画に被爆者を登場させないこと」。二つは、「原爆ドーム、百メートル道路、原爆慰霊碑などの原爆記念類を映画で観せないこと」である。「被爆者の出演拒否」の理由は、行政が被爆者認定に厳しい条件をつけたために、多くの被爆者が白内障、白血病の医療と生活援助を受容できていないのが現実であった。被爆者が映画に出演すると、「被爆者は健康回復した。生活も安定した」と、被爆者認定がいつそう困難になることが怖いと説明した。しかし、映画制作に裏方協力することは拒まないからであった。

被爆者が「原爆記念碑の映像化を拒絶」した意図は、広島市の「復興計画」にたいする反発であった。行政は、原爆投下で崩壊した街路・建造物を平和都市建設の「復興計画」として政治の核心としていたが、その実態は、\*街路計画は百メートル道路など拡大大道路、\*公園緑地計画は基町の中央公園、カープ球団創設、\*原爆ドーム、原爆慰霊碑は「復興計画」ではなく「観光計画」であって、行き場もなく住まいを追い立てられた被爆者の切り捨てにたいする怒りであった。

『河』を製作した60数年前の記憶を記載しました。映画制作にご協力いただいた被爆者に謝するものです。

※『河あの裏切りが重く』は、原爆投下の目標にされたといわれている相生橋東詰から約1.5kmの堤塘敷に不法住宅が密集する「相生通り」がロケ地のひとつとなっている（現在の相生通りとは異なる）。相生通りは、1963年頃に国の補助政策を期待して「原爆スラム」と呼称され、作品の撮影が行われた1966年頃は、広島市の緑地開発のため住民に立ち退きを迫る強制代執行が行われて、住居に困窮した人々が原爆スラムへ流れ込み、一層複雑な様相を呈していた。（参考文献…被爆70年史編修研究会『広島市被爆70年史あの日までそして、あの日から1945年8月6日』広島市2018）